

# 朝散太夫の末裔

長谷川時雨

青空文庫



朝散太夫ちようさん だいぶとは、支那唐朝の制にて従五品下の雅称、我国にて従五位下の唐名とある。

太夫とは、支那周代の朝廷及諸侯の、国の官吏の階級の一、卿の下、士の上に位すとある。もつと委しく、博学らしく書きたてると、支那唐代の官職に依る貴族の階級中、従二品より従五品下までの名目だった語で、従二品が光禄太夫、正三品が金紫光禄太夫、従三品銀青光禄太夫、正四品上が正議太夫、正四品下が通儀太夫、従四品上が大中太夫、同下が中太夫、正五品上が中散太夫、下が朝議太夫、従五品上が朝請太夫、下が朝散太夫ナリである。

我国右近衛将監うこんえしやうげんを右近太夫、公卿の子でまだ官位のないのを、いづれ五位に叙せられるからというので無官の太夫という。

ここまでくるとやつと馴染がある。無官の太夫なら敦盛という美しい平家の若武者で、大概の人が芝居や浄るりや、あるいは稗史でよく知っている。もつとも朝散太夫浅野内匠頭長矩のしみながのり、即ち忠臣蔵の塩冶判官高貞えんやはんがんもそうである。

その、従五位下朝散太夫の唐名をもった人が、湯川氏一族、御直参ならずもの仲間の、

藤木の先祖の一人。

藤木一門には、それよりもつと偉い人物があつたのかも知れないが、アンポンタンには見上げるような高い石碑に、××院殿従五位下前朝散太夫なんとかのなんのなんとかと、とても長く彫みつけてあつた朝散太夫を子供心にすっかり覚えこんでしまったのだつた。藤木家の寺院は、浅草菊屋橋の畔にあつて、堂々とした、そのくせ閑雅な、広い庫裏をもち、藪をもち、かなり墓地も手広かつた。昔はもつと広大かつたのであろうと思わせたのは、藤木氏一門のどれも美事な見上げるような墓石が、両側に五十余基も正然と、間隔をもつて立ちならんでいたのでもわかる。震災後の市区改正で、いまでは電車の走る区域になつてしまつているかも知れない。

「よくあの墓石を売らなかつたな。」

と誰かいうと、このお旗本は、杯口を下の膳の上において、瘦身の男が、猫のように丸めた背中をくねらし、木乃伊みたいに黒い長い顔から、抓みよせた小さな眼を光らせて、

「やつたさ、お前さん。」

まあお聴きといったふうに、招き猫の手つきをする。

「大いところは目につくから——へッ、鰻だと思ってるんだね、小串のところをやったの  
 だね。性質（石の）のいいやつばかりお好みと来たのさ。そうさ、姐さんおかわりだ、へ  
 イ宜しゆうつてんで、なんしたんだが、あんまり大きすぎたのはいけね、眼にたつん  
 で、客の方が二の足でね、なにせ、だいぶお立派な方々でございまして、へッて、平伏  
 つちまやがるんだから。ありやいけないね、あんまりゴテゴテの戒名なんぞつけたの  
 は。子孫へ不孝つていうもんだ——なにつてやがる、さんざ香このように食つといて——」  
 自嘲して、お酒をまた一口のんで、長いまばらな黄歯を出して見せて、

「いまじやこの歯じや喰えもしないさ。」

「鰻をおあがり。」

「おおけに。」

わざと京阪言葉のまねをして、箸のさきにつけたこのわたを舌の上にとらす。

中の間の十二畳、蔵前の拭き込んだ板の間の方によつて、茶だんすや菓子戸棚や、釣  
 棚のある隅に大きな長火鉢がある。その前の座布団には、祖母か、父か、たまに母が座  
 る。その近くに夜の洋燈も釣りさげられる。夏でもなければ庭にむかつた縁側や、玄関前  
 の庭にむかつた肘かけ窓の方へ寄らず、懇意なものはみんな火鉢の方へ丸くなった。無論

アンポンタンの生れた家のことで、藤木さんは此処へくると、気さくで皮肉で、小心な正直ものだった。

彼は気の弱さと小ささからくる偽悪家だった。それは若い時は仕様のない放蕩者でもあったであろうが、それは時代と環境の罪もあって、彼ばかりがわるいとは言えない。ヘドッコになってしまった江戸児の末裔は、誰もがそうであるように、辛辣な軽口で自家さんぶをやる。自分自身で自分をメチャクチャにこきおろして、どうですといったふうに聴手の困るのを痛快がる。みじん見得はないようで、そのくせ見得ばりで、それがせめてもの自棄した修飾である。鼻つぱりの強い意気地なしなのである。

寄席の高座にのぼる江戸風軽口の話口をきくと、大概みんな自分の顔の棚下しや、出来そくなつた生れつきのこきおろしをやる。それがみんな本気だと思つたらおめでたすぎる、全部が全部みな徹底した市井の聖人だとおもうものもなからう、とおなじで、生活惨敗者は自己をこきおろして自慰する。そこまで察してやらないものは、厭がらせばかりという人だと鼻つつまみにする。あの時代の藤木さんもそんな風にとられましたが、家のものたちも彼が小心で正直ものなのは許しきつていた。子供は変なところで相手の直情に面してしまうものだから、対手を職業や、その折の境遇で見直したり見違えたりはしない。

それにあたしがアンポンタンで無口だったということが、彼に自分の子供の前より安心させ気楽に思わせたのかも知れない。

自宅うちにいと皮肉やで毒舌で、朝から晩まで女房に口小言をいつている藤木さんも、アンポンタンには馴染なじみ深い面白い大人だった。あたしは玄関の八畳で、角火鉢の大きなのにあたってはいる彼の顔を穴のあくほどマジマジと見ていることがあった。子供心には、それから十年も十五年もたった後の顔と、そんなに違わなかつたように思えた。眼は青かつたが、その眼は高すぎる鼻の方へ引っぱれて、猿猴えんこうにも似ていたが、見ようでは高僧にでもありそうな相もあつた。やや下卑げびていたこともたしかだつた。福は内の晩に——年越しの豆撒まめまきの夜——火鉢の炭火のカツカツと熾おこつているのにあがつている時、あたしは祖父さんの遺品かたみの、霰あられ小紋こもんの、三ところ家紋もんのついで肩衣かたぎぬをもつてきて藤木さんの肩にかけて見た。すると藤木さんは言つた。

「チヨン鬘まげに結いつておくれ。」

あたしは前かけをとつて、彼の頭にチヨン鬘を結びつけた。小僧さんのする盲目めくらじま縞まの真黒な前かけでもあることか、紫地に桜の花がらんまんと咲いて、裏には紅絹もみのついでいるちりめんのチヨン鬘、しかも額ひたいに緋ひぢりめんの紐ひもの結び目が瘤こぶのように乗つかつている。

それで平気で煙草タバコを吹かしている。その背中が真ん丸いので、あたしは拳骨げんこでコツコツ叩たたいた。

「痛いよ、痛いよ。」

「でも猫のようだから。」

「ニヤアン、鍋島なべしまの猫だよ、化猫ばけねこだよ。ゴロニヤーン。」

彼はフーツといつて、背中を見る見る盛上げた。

それは全く奇怪な存在だった。アンポンタンはおしっこが出るほど吃驚びっくりして、火鉢の縁ふちを握ったまま、首をすくめて中腰になった彼を見詰めた。

その頃藤木さんは、災難つづきで極度な落目だった。下谷青石横町の露路裏のドンツマリの、塵埃ごみすて場の前にいたが、隣家となりの女髪結さんから夜中火事を出して、髪結さんは荷物を運び出してしまつてから騒ぎだった。一ツ棟だ、かえつて火元よりは火廻りの早かつた藤木の方が何もかも丸焼けで、垣根を破つて隣裏となりうらへ逃出し一家命いっかだけは無事だった。で、神田白銀町しろかねちやうの煙草問屋へチンコツきりに通うようになった。あたしたちが牢屋ろうやの原はらとよぶ、以前の伝馬町大牢のあつた後の町から、夕方になると、蝙蝠こうもりにおくられて、日ひ和下駄ひよりげたをならして弁当箱をさげて、宿り番とまに通つて来てくれたのだった。



藤木さんはよくいろんな話をしてくれた。御上洛（將軍慶喜）のお供をしたことや、京女のこと——京女の体つきまでにせて、へんな京言葉をつかった。

「うつるか。」

「つてやがるから、

「かさか。」

「つて聞いたらね、

「なにいうてやな。」

「つて怒りやがった。といった時、母がちらと聞いて、

「子供の前でそんなばかな事をいつて。」

と立腹した。藤木さんは亀の子のように首をすくめて、

「なにね、女郎おやまのはなしをしていたのですよ。女郎おやまにんぎよう人形なんていうと美しいが、ブヨ

ブヨで汚ねえつてね。」

アンポンタンは藤木さんの黄色い歯を見て、どうしても京の女郎というものが美しくないと信じられなかった。

「ねえお滝さん、女郎おやまがこういつたんでさあ、旦那さんうつるかって。だから、梅毒かさかつ

てたら、なにいうてやの、あほらし、ったんでね、なんのことかとおもつたら、それ、やつぱり京女は優しいところがあるのさ。情がうつるかと思いたんだってえのよ、返事がとらんかんだから、厭いやな奴やつだと思われようつてもんさ。だけれど、その時いつたね、東あずまおとこ」

男 は金ばなれがいいつてさ。そういつたつてお前さん。貧乏旗本に金なんぞあるわけはないんだが——男振りでもてたのかもしれないねえ。——なにしと、それこそ、なにいうてやの、あほらしいだ。」

「藤木さん、藤木さんも小さい時分、前髪を結つてたの？」

あたしにはそんな駄じやれはわからなかつたから、自分の質問を出した。

「オ・イエース。」

藤木さんは胸を反そらして膝ひざの上に両手をおいた。

「秀才しょうさいだつたのだよ。なんて、菅かん秀才しゅうさいはお芝居の寺小屋へ出る。他ほかの秀才しょうさいは他人ひとのことで榎え本もとの釜かまさんなんかがそうだつたのだね。僕ぼくなんぞはおんなじように、子しのたまわくなんてやつて、なんの事だかチンプンカンだったのだ。だからだめさ、勉強べんけんしなくつちや、なんでもいけないさ、君のお父さんなんか、剣が利いたからたいしたものだ、剣の方かたじゃどうして立派りつぱな手腕うでまゑだつたそうな。今だつてなみたいていなものは前へ廻れま

「や。」

「釜さんて誰のこと。」

「榎本武揚えのもとたけあきつて人があるだろう。」

「ああ、知ってる。」

「あの人のちいさい時分には、家が貧乏で——はて、彼あそこ処は何人扶持ふちだったけかな？ 根岸の奥でね、藪やぶのある、門に大きな樹きのあつた家さ。釜さん、遊ばないかつたつて返事もしやしない。子しのたまわくだ。なにしてやがるかと思つて、破やぶけた窓の障子から覗のぞくとね、ポンポチ米を徳久利とくくりで舂つきながら勉強してやがるんだ。使いにゆく時だつて破れ袴はかまをはいてね、こちら悪太郎の仲間になんかはいらねえで、いやに賢人ぶつた子供こどもだったよ。ヤイ釜公、どうして遊ばないんだと怒鳴つてもだめ。みんなで石ころを投ほうりこんで逃出すんだ、そりやね、時には、外おもてでいじめたこともあるさ。だけれど、その時敗まけて泣いた奴の方があんなに偉くなつて、わしやチンコツきりだ。わしやかなしい。」

悲しそうにわざといつて唄うたのように唄つた。

そこでアンポンタンは、武家は精しらけた白米こめをもらうのでないという事を知つた。どんな風にして、お米を精しらけるのかきくと、薬研やげんで薬を刻むようにするのだといった。本町辺は

薬種問屋の多いところなので、あたしは安座をかいで、薬草を刻んでいるのを見て知っていたからよくわかった。祖母の持薬を買いにゆくと、種々な薬を集めて、薬研でくだいて袋に入れてくれた事も見ている。徳久利でどうして舂くのかといったら、薬研では玄米が破けてしまうから、貧乏徳久利で舂くのだといった。

「藤木さんもお米をついたの？」

「私の家は禄高だけ売ってお金にして、入用だけ白いお米で届けてもらったから——という人と人聞きがいいが、来年の分も、さらい年の分も、金にし貸りてしまうので、よこす米がないってわけさ。浅草のお蔵前に、幕府の米蔵をあずかっている商人があつてね、旗本の咽喉を押えつけたのさ。そこから金にしてもらったり、白米で渡してもらったりしたものでね。清元の唄にある——首尾の松が枝竹町のつて——百本杭の向う河岸の、お船蔵の首尾の松さ、あすこにわれわれのもらう、幕府の米がうんとうなつていても、そりやもう我々のものじゃないって訳でね。」

「どうしてお金になってしまうの？」

「そこがね、どうも、ちつとお話にならない訳でね。」

藤木さんは頭をクルクル撫でた。すると祖母が赤い胴の着物をもって来て、

「寝間着の丈が短くて、足がつめたいとお言いだそうだが、長いのが間にあわないから私  
の下着を着て寝たらよい。」

「へえ？」

さすがの藤木さんも鹿の子模様の赤い絹の胴をつまんで、呆れた顔をして言った。

「結構でございます。だが——いやに思わせぶりというわけで、有難いような、嬉しい  
ような——百貫めの借銭負うて、紙衣着た伊左衛門じゃないが、昔をいやに思いださせる  
ね。尤も伊左衛門っていう柄じやなかったってね。そうそう、あかい胴の方が似合う、お  
軽っていう役どころさ。——え？　なんだって、猿芝居だって？　戯談じやないよ、

廻りの八丈の方が本役だった？　そうですよ、そうだよ。へい、三角銀杏老お見舞い  
たす。おみやくはいかがかな？」

あたしの手をとって脈を見る真似をする。その晩、子供たちは何時までも眠なかった。  
藤木さんがおひきすその、赤い胴ぬきの着物を着るのを見るまで——



# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 朝散太夫の末裔

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>